

關東にては既に今年の櫻は散りをはんぬるも、弘前など未だ満開を待つ所もあるこの日、文語の苑研究會にて佐久間象山の櫻賦（さくらのふ）讀解發表のことあり。

この詩象山の最高傑作とせられ、その眞迹（しんせき）は今なほ東京北區の飛鳥山公園に石碑として存す。嘗て吾或る人より屏風の墨迹よりこの詩解讀の依頼を受くるの縁あり、また「文語名文百撰」にはその冒頭部を紹介す。此の度は敢て全文の淺釋に挑む。

その準備を兼ねて、日本人と櫻に就きて山田孝雄先生の名著「櫻史」（あうし）を繙く。是が「櫻賦」と極めて軌を一にするを見て感銘深きものあり。王仁の和歌「難波津に咲くや此花冬こもり今は春べと咲くや此花」は古今和歌集假名序に引用ある歌にて、「此花」は梅なりとする説多きも、「櫻史」は先づ冒頭梅を愛せる大伴旅人の子家持の天平勝寶七歳の難波宮を讃ふる反歌「櫻花今盛りなり難波の海おしる宮にきこしめすなへ」を引きて櫻なりとし、「櫻賦」亦「浪津を皇嗣に詠じて開耶（さくや）を邦媛に命ず（王仁の歌にも「咲くや」を櫻の姫木花開耶姫に當ててゐる）」と浪津即ち難波に咲くを櫻なりとす。

更に「櫻賦」は櫻の美を表すに一面に満開の状態を繰返し描寫す。「列樹（れつじゆ）の芙蓉（ふんぷ）を翳し枝（えだ）の交加（かうか）を鞞（たきう）す（多くの木が群り生えて枝が重なり合つて垂れ下がつてゐるのを満開の花が覆うてゐる）、「綺羅（し）を西林に曳（ひ）き驢驢（しゆくさう）を東野に歩ます（満開の櫻は恰も名馬驢や驢が紗（うすぎぬ）を曳き流しながら東西に亙つて歩んでゐるやうだ）」など。一方個々の花の咲きやう、まして散り際などには殆ど言及なし。「櫻史」にも亦附録に「はな」なる隨筆ありて日本人の櫻を愛する根源を考察し、満開の個々の花が一體となつた木々が更に集つて雲か霞か紛ふまでの景色を愛づとす。

茲に注目すべきは、近時（當時）日本人の櫻を愛するはその散り際の潔さなりとし、暗に潔く國の爲に命を捨つべしとする論あるを排すなり。「櫻史」出版前後の時代は、紀元二千六百年の祝賀と共に支那事變の長期化ありて、歐米思想を排し、日本への回歸を主張の文運漸く盛んとなり、萩原朔太郎の文語回歸、愛國百人一首の撰集、北原白秋の海道東征作詩、信時潔作曲など昭和を代表するの花咲揃ふも、他方山田先生祕かに憂へ給ひける、「散る」を強要せむとするが如き國粹主義瀾漫（びまん）し、特に古典文化の理解には全く寄與せぬ簡易日本語をアジア向けに發信せんとする等、墓穴を掘り進めたりけり。

當時飛鳥山近くの小學生の吾かゝる事情知る由もなく、「同期の櫻」の歌を聞きて育つ。後年この時代の文物に觸るゝ機會多く、その素晴しさを悦ぶと共に、それを踏ふ中等教育の掉尾に接したる幸ひを噛みしむ。この日の數日前四月十九日海道東征の演奏東京藝術劇場にて行はれ、切符即日完賣の盛況なりしとぞ。戦後七十年を閲（けみ）して眞の「日本への回歸」の再出發とこそならまほしけれ。

「櫻史」の初版は昭和十六年、當に大戦前夜に優美を極むる装釘にして、幻の書籍にありなむも、書籍蒐集家として著名の學兄土屋博氏、當日拙講の後、早速に古書肆を探索、見事入手と云々。長く同家の家寶として傳はらむ。